

LINEのメッセージで、上司や経営陣からの指示や問い合わせを受け取っており、報告もLINEですることもある」

これは、昨年11月の第20回経営法友会大会のパネルディスカッションⅡ「2030年に向けた法務機能の在り方」にパネリストとして参加させていただいた際に、私が発言させていただいたものです。その後、「LINEっばいですねえ」という半分呆れたような驚きのお言葉のほか、「本当にLINEなどでやり取りをしているんですか？」など、さまざまなお声をいただきました。

もちろんLINEを使って仕事をしていることは本当ですし、弊社の場合、まずはやってみようという文化ですので、担当者の思いつきベースでも、こんな新しいサービスはどう思いますか？ などというLINEのチャット上でのやり取りは多くあります。思いつきの段階で難しいなあという場合もよくありますが、そういうパツとした思いつきの中から、ユーザーに役立つ新しいサービスにつながるものもありますので、日々、上司や経営陣、事業部門などからもLINEのメッセージを受け取り、メッセージを送信しながら業務を進めているのです。

とはいえ、日々の仕事がすべてLINEで進んでいるのかというと、そういうわけでもなく、もちろん、対面でも経営陣に報告をします。また、日々事業部門からも色々と相談を受けていますので、LINEのチャットによるやり取りや意見交換と、顔を合わせての議論をどう組み合わせていくのかということを常に考えています。そうした中で、法務部門も会社の成長に少しでも貢献できるように、日々の業務をどうやって進めていくのか模索している毎日について、皆様にご紹介できればと思います。

まず、業務を進めていくにあたって、われわれ法務部門にとってのクライアントは誰なのかということを考えてみますと、所属す

る会社の事業部門も含めた社内全社員がクライアントなのかなあと考えています。クライアントから喜んでもらうこと、満足感を与えるということは、会社の中にいる者とはいえ、他人にリーガルサービスを提供する者として常に心掛けています。そして、事業部門の後ろには多くのユーザーがいて、事業部門はユーザーに満足感を与えるために色々なサービスを検討していますので、われわれ法務部門は直接ユーザーとやり取りすることは少ないかもしれませんが、

法務の眼 Legal Eyesight

丸椅子施策

LINE株式会社 法務3チーム／フィンテックカンパニー
LINE Pay株式会社 執行役員 コンプライアンスチーム
マネージャー

伊藤 淳 (Atushi Ito)

普段やり取りしている事業部門に喜んでもらい満足感を与えることは、結局はユーザーの満足感にもつながることになるのだろうと思っています。

そして、事業会社では日々さまざまな問題が発生して、法務部門がその対応に追われることがあります。はじめは小さな問題であっても、初動対応が遅れることによって、大きな問題になることは会社ではよくあることです。そうすると法務部門では、何か発生したときには、一刻も早く事業部門から相談を受けるということが非常に重要になります。そこで、事業部門から、早めに事案の相談をしてもらえるように、相談しやすい環境を整えてあげることも、法務部門として重要なことなのだろうと思っています。

さらに、事業会社にいますと、法務部門であってもスピードは非常に重要になります。も

もちろん法務部門として回答するときには、正確性も重要ですが、ここでいう正確性は、事業部門から求められているスピードの中での正確性なのかなあと考えています。いくら正確な回答であっても、サービスのリリースのタイミングを逃してしまっただけでは意味がなくなる場面というのありえます。そこで、スピードを確保しつつ正確なアドバイスをするために、できる限り事実関係を正確に把握することが法務部門として大事なことなのだろうと思っています。

そ うした中で、弊社の法務部門での取組みとして、たわいもないことかもしれませんが、私の席の横に小さい丸椅子を置くことを始めました。いつでも誰でも、この丸椅子に座って話しかけてもらうことで相談しやすい雰囲気を作り、また、やはり事実関係の正確な把握のためにはお互い膝を突きあわせて、作成した図や表などを見ながら話すことは非常に重要です。そしてお互いに顔が見える関係になって、しっかりと議論することで少しでも満足感を与えられればということを考えてのものです。

経営法友会大会のパネルディスカッションでも、諸先輩も同じような取組みをしているということを知りましたので、この丸椅子施策（施策というほどのことでもありませんが）には少しばかりの自信と安心感を持ったところです。

丸 椅子施策によって事業部門の満足感、ひいては少しでも会社の成長につながればと励んでいるところですが、気をつけないといけないことも多くあります。

法務部門が陥りやすい状況として、できない理由をつい考えてしまうということがあります。事業部門が新しいことをしようとする場合、過去にやったことのない事案であれば、できない理由を探すのは比較的容易なことが多くあります。もちろん法務部門は会社の最後の砦になればいけませんので、事業部門に迎合することはあってはいけません。しかしながら、私が最近、経営陣はもちろん、事業部門に対して伝えているのは、法務部門はブレーキを踏むの

ではなく、皆さんが安心してアクセルを踏むことができるように心がけているのだということです。

また、法的な判断をすること自体が考える目的となってしまうことにも注意しています。いわゆる法的な論点がある場合、法務部門にはマニアックな人間が多いため、ついつい議論のための議論をしてしまいがちです。法的な論点を議論するのは、あくまでもビジネスを実現するためなので、経営陣や事業部門に対しては、法的問題とビジネスの関係を踏まえて、わかりやすく説明するように心がけています。

弊 社の「止まり木」でもある、私の横の丸椅子に相談者が来た時に守りたいと思っているのは、決して嫌な顔をしないようにしようということです。日中の業務も終わり、夜になって、パソコンも閉じて、さあ帰ろうかなあというときに、ふと横を眺めてみると、丸椅子に座りたそうな事業部門の方がいらっしやることがあります。この時は必ず、快く(?)迎えて、相談に応じる毎日です。

法務部門としての仕事の進め方として、LINEを使ったやり取りは、スピード感もあり、弊社らしい仕事の進め方でもあるので、非常にエキサイティングです。一方で、丸椅子に座りに来た方の相談に乗ることは非常に楽しい時間でもあります。結局は双方のバランスなのでしょうが、私は、最終的には丸椅子に座った方と、顔を合わせた議論というのは、非常に重要なのではないかなあと感じている毎日です。

